

障害のある子どもの療育や教育で「包括的」は何を意味するか

企画者	七木田 敦 (広島大学大学院教育学研究科)	松井 剛太 (香川大学教育学部)
	真鍋 健 (千葉大学教育学部)	
司会	佐藤 智恵 (神戸親和女子大学発達教育学部)	河口 麻希 (山口学芸大学教育学部)
話題提供者	真鍋 健 (千葉大学教育学部)	
	仲野 真史 (東京学芸大学附属特別支援学校)	
	菅原 宏樹 (千葉大学教育学部附属特別支援学校/千葉大学教育学研究科)	
指定討論者	吉川 和幸 (帝京科学大学教育人間科学部)	

KEY WORDS: 包括的/包括性 スペシャリスト/ジェネラリスト つながり

【企画趣旨】「私たちは丁寧^①に子どもをみます。我々の視点を皆さん（保護者・保育者・学校の先生…）もぜひ」といったメッセージを、暗にも直にも専門家側が発することがある。「丁寧=専門（性）に基づき細かく」。これは特殊教育の時代から我々が専売特許としてきたことだが、このメッセージに対して「保護者が本来持っている養育の考え方や力を台無しにする」「専門」が子どもをパーツ化する」「専門」の異なる複数の支援者のアドバイスが、生活を第一線で支える保護者の負担を相当なものにする」等の警笛が鳴らされている。これを防ぐためにも、支援の枠組みに「包括性」を持たせることを期待する声もある。ただし、「包括」という言葉の位置づけや扱いは、専門領域間でも微妙に食い違いがある。本シンポジウムでは、いくつかの支援モデルや実践の報告を通して、「包括（性的）」とは具体的に何を意味していて、当事者や支援者に何をもちたらすのか、あるいはそれが支援の枠組みに添えられなければ一体何が問題になるのかを具体的に論じたい。

【話題提供①】「活動に根差した介入：Activity-Based Intervention から考える、支援における包括性」（真鍋健）

90年代米国で幼児期特殊教育領域（ECSE）が経験した、幼児教育（ECE）との間での幼児期インクルージョンの方法論をめぐる論争の帰結点は「あたりまえの（保育や家庭）生活にこそ、理想的な学びの機会が含まれている（Hull ら、1996; Wolery, 2004）」ということにあった。偶発的でもあるこのチャンスをもものにするために注目されたのが、幼児教育アプローチや行動分析学アプローチなどの理論・方略を融合させたABIである。ABI やそれに類する自然主義的アプローチでは、長期・短期目標を日常の生活文脈に「埋め込む」という手法を用い、子ども・環境間の意味のある相互作用の中に「介入」を位置付ける。ただし、むやみやたらに「目標を埋め込む」だけでは、介入は成り立たない。ABI では、①「評価→計画→介入→再評価」がつながらなければ（Link しなければ）、子どもにも家族にも利益はもたらされない」としてシステム全体の包括性を、また②「何を見るかは何を教えるか、と同義である（Bricker, 2010）」として包括的な子ども理解の重要性を説いている。双方の「包括」が具体的に何を意味しているのかを紐解きながら、本テーマについて議論を行いたい。

【話題提供②】「SCERTS モデルから考える、支援における包括性」（仲野真史）

SCERTS モデルは、「自閉症スペクトラム障害の子どもたちのための包括的教育アプローチ」と銘打たれた支援モデルである。特定のスキルを対象とした指導プロトコルではなく、社会コミュニケーション・情動調整・交流型支援を柱としながら、ASD 児の発達とその家族を包括的に支援するためのモデルである。特定のスキルに特化した“アプリ”

ではなく、アプリの土台となり、全体を動かすための“OS”と例えられることもある。また、このモデルの包括性は、複数の発達領域を対象とするということに留まらない。スキルとそれが置かれた文脈、ある領域の能力と他の領域の能力、子どもとパートナー、支援者と支援者が置かれた支援ネットワークなど、様々な次元で包括的に発達を捉えようとする。こうした枠組みを有効に生かすためには、単に「あれもこれも全部」とパラパラに各要素を網羅するのではない、各要素間の関係の捉え方が重要だと考えられる。包括的な枠組みが支援に何をもちたらすのか、また包括的な視点が有効に生かされるためには何が必要なのかを考えていきたい。

【話題提供③】「何をどう記録すればいいのだろうか・・・遊びの記録表の導入と活用をめぐる4年間の苦悩と手ごたえ」（菅原宏樹）

本校では長年の「遊び」の実践において、能力観に立った指導や、特定の指標に基づいた授業設定は行わず、子どもの姿から授業を考え、かつ評価等は必要最低限に、ありのままの姿に寄り添うことを基本としてきた。一聴すると子どもと場との関係をじっくりとらえながら、児童や状況の理解に努めることができそうなやり方であるが、同時に、教員が授業のやり難さや説明責任を果たすことの難しさを感じていたことも事実である。そういった中、「人と関わる力：遊びの中で培われる対人的な発達指標」を交えて子ども理解を行うツールである「遊びの記録表」を導入した。これにより、何かしらの目標・ねらい等に向かって専門的な指導を行うというスタイルに慣れた特別支援学校の教員にとっては、PDCA サイクルを含めた授業展開が分かりやすく/やりやすくなった。ただし、他方で、状態や能力の評価をかつちり行うことで、もともと大切にしていた何かを失ってしまうのではないかと、ということも危惧していた。

話題提供では、こうした「遊びの記録表」の導入をめぐるこの4年間の経緯について、その中で感じた苦悩、授業展開の工夫、そしてつかんだ手ごたえなどを交えながら、「包括」について考えたい。

【指定討論】『包括的』な支援の陥穽（吉川和幸）

「包括的」な支援とは、端的には生態学的な視点と発達論的な視点の調和から織り成される支援の一つの有りようであると考えられる。しかしながら「包括的」な支援であるがゆえに、計画の円環のもと、子どもの生活世界の多くが評価の眼差しで捉えられることになる。その意味と陥穽について、三氏の話題提供を踏まえて議論したい。

(NANAKIDA Atsushi, MATSUI Gota, MANABE Ken, SATO Chie, KAWAGUCHI Maki, NAKANO Masashi, SUGAWARA Hiroki, YOSHIKAWA Kazuyuki)